

「花桜折る少将」と狭衣物語との交渉

土 岐 武 治

一

狭衣は源氏の子息であると称しても敢て過言とは思はれぬほど、これら兩作品には直接の交渉が多く見受けられるのである。しかしながら、狭衣の全巻を委細に検討する時、この本の著述材料には、源氏以外に宇津保・和泉式部・「花桜折る少将」などの諸物語も著作上色々影響を及ぼしてゐることが認められる。小稿はこれらの先行文学中、梶中納言物語の一篇である「花桜折る少将」と狭衣との典拠関係について論証することにする。

さて、狭衣物語巻四上の本文中に次の一場面が見える。すなはち物語主人公の狭衣は、今は齋院の身となる源氏の宮に恋慕の情を抑へ難く、一日賀茂の社を訪ねた。折しも桜の盛りは御垣のうちまで匂ひ漂つてゐるのであるが、狭衣はその景趣を賞でながら齋院の女房である新少将に、「みかきもる野辺の霞もはかなくて折らですぎゆく花桜かな」と詠みかける。源氏宮をどうすることも出来ぬといふ狭衣の歌意を解せぬ新少将は、「花ざくら野辺の霞のみま／＼に折らでは人の過ぎるものかは」と歌を返して戯れるのである。そこへ宰相中将や若宮たちが鞠を持つて狭衣を訪ねて来る。やがて境内

「花桜折る少将」と狭衣物語との交渉

の桜の下で蹴鞠が始まるのであるが、その様を打ち笑まされながら眺めてゐられる狭衣の姿は、誠に美しく立派なものであつた。(以上第一段)

狭衣はその催しの帰路、日頃致仕の大納言の女への橋渡しを頼んであつた人から「今晚が都合よろしうございます。」と言はれたので、誘はれるまゝにそちらへ車を向けられ、その途中に崩れ土塀に囲まれた一軒の家があつた。そこに立ち止つた狭衣は侍従の道季を呼んで、その家主を尋ねさせると、それは故式部の御邸で、そこには故式部卿の子息である宰相中将も住まはれてゐるとのことである。桜花の咲き匂ふこの邸の中からは、誠に美しい琴の音が聞えて来るのに、狭衣は一段と耳を傾けてあだが、この音は自分が長い間心にかけてゐた宰相中将の妹の手でなからうか、と思案しながら格子の隙間からこつそり覗くと、女はその音色にもふさわしく、いかにも美しい姿をし、多く見た女の比べものにもならないほどである。だがよく見れば、それは意外にも宰相中将の母であつたのだ。自分はこの母に恋する、それは餘りにも不似合な怪しからんことだと、独り笑みしながら狭衣はその場を出てゆかれるのであつた。(以上第二段)

車に引き帰つた狭衣の目ざして行かれる所は、致知の大納言といふ人が大切にかしづきもてなしてゐる女の家である。この女の容姿は大変美しいといふ事を、狭衣の母宮に任へてゐる古参の女房である右近の君といふ女から聞いたのである。この右近の君は大納言の家にも親しく出入りしてゐるので、狭衣は好都合とばかりに、その女を呉れと頼むのであつた。右近の君にとつては、それが親たちに知れてはならないので、機会を窺つてゐたと、今晩は絶好の機会である。やがて道季の車でお出でになられた狭衣は、案内を乞はれると「そのまゝすぐお入り下さい」との事でしたので、狭衣はすぐさま中へ入つて行かれる。火もいゝ加減あかるくしてあるので、姫君の姿はなるほど美人の中に入るやうに見受けたが、とても源氏宮には比べものになるので狭衣は失望して帰つてしまふ。(以上第三段)といふ内容になつてゐる。

ところで、右における狭衣物語の構成する素因は、「花桜折る少将」の構想と頗る相似てをり、著作上兩者の間に直接の影響關係を認めざるを得まいと思はれる点が多々存するのである。よつて、以下これらの考証を論述するのであるが、先づ行文の都合上、左に「花桜折る少将」の物語の梗概を述べることにする。

すなはち本物語の主人公である少将は、ある女の許を起き出て家路を指して行く途中に、以前心を語り合つた女が住んでゐた一軒の小家に目がとまつた。少将は供のものを少し遠ざけて、透垣のものと生えてゐる群薄の茂みの中に隠れて覗くと、中には美しい五六人の女たちが混つて遊ぶ一人の美しい女を発見した。それは故源中納

言の姫君であつた。(以上第一段)

翌朝、少将は昨夜の垣間見た女の処へ手紙を「さらざりにしへよりもあをやぎのいとゞぞけさはおもひみだるゝ」と書いた。女からは「かけざりしかたにそばへしいとなればとくとみしまにまたみだれつゝ」と返すのである。少将はこの女からの返事に見入つてゐると、源中将・兵衛佐などがお供のものに小弓を持たせてお出でになられた。一同は庭の桜を賞でながら歌を詠み合ひ、冗談を興じつゝ一緒に家を出られた。夕方に少将は父の邸にお出でになつて、暮れゆく春の空を御簾越しに眺めるのであるが、その御容姿は、花の美しさも庄倒されてしまふ心地がした。侍従の光季といふ男が、「近衛の中門のあたりにすばらしく琵琶を弾く女がゐますよ」といふのを、少将は聞かれて「あの家なら私も知つてゐる。是非案内して欲しい」と言はれる。この光季は、昨夜少将が隙見をされた邸の留守役の少納言の君と契りを結んでゐる關係上、「あの家の御主人とは、亡くなられた源中納言の姫である。本当にお綺麗でございます。姫を引きとつてゐる叔父の大将殿は入内させようとしてゐられるのですが」と少将にお告げすると、少将は「私のものになるやう計つてくれ」とおつしやられた。ところで光季は、大将殿に仕へてゐる女童と馴染みの間なので、右の事情をこの女童に語つて少将と姫君との間を取り持つてもらふことになつた。(以上第二段)

ある夜、光季は少将に「今晩こそよろしうございます」と申上げると、少将は早速光季の車を出駈けられるであつた。母屋の隅に寝てゐるのが相手の姫君かと思つて車に乗せて見ると、なんとそれは年老いは祖母尼であつた。(以上第三段)といふのが、この物語の

大要なのである。

この「花桜折る少将」の筋書と、狭衣卷四上における右の場面とを比較する時、一見して両者とも人物・事件・背景など、凡そ物語を構成する取材は勿論のこと、物語の展開の手法に至るまで略々合致するやうになつてゐる。たゞ後段にも解説する通り「花桜折る少将」の第一段・第二段・第三段といふ物語展開の仕方、狭衣の場合の第二段・第一段・第三段といふ風に文段の順序を並び換へた形に両場面の構成が符合することになる。つまり狭衣物語第二段も「花桜折る少将」の第一段も、その筋書きは共に物語主人公が女の所からの帰途に、一際風情に富む一軒の小家が目にとまつた。この家には以前関係をもつた女がある筈だと思つて邸の中を覗いたら、そこには意外な美人を見出したといふやうに両作品は共に同筆の向趣となつてゐる。殊に狭衣では「大将も出で給ふに中略、道すがらながめ給ひても、思ひたちし本意は云々(狭衣卷四上)」と伝へ、狭衣が賀茂の齊院源氏宮からの帰路の出来ごとを取扱へば、「花桜折る少将」の発端でも「月にはかられ夜ふかくおきにけるも云々(花桜折る少将)」とのやうに、少将は或る女の所からの帰途の事件を取り上げてゐる。しかも、この狭衣第二段の文中に「うすかすみにくもりたる月影さやかにあらぬしも、いとゞもの心細けなる空のけしきを、道すがら眺め給ひて中略築土のところへくづれて、花のこずゑどもしろう見入らるゝ所あり、道季召して、如何なる人のすみかぞ云々(狭衣卷四上)」とあつて、狭衣は途中から引き返さうかと躊躇し立ち止つてゐる目前に、風流じみた小家を見出した。侍従の道季をして尋ねさせると、それは狭衣が以前から氣にかけて

「花桜折る少将」と狭衣物語との交渉

ゐた宰相中将の妹君の邸であつたといふ筆法である。このやうな構成は、「花桜折る少将」の第一段中にも「くまなき月にところへくづれて花の木どもゝひとへにまがひぬべくかすみたり中略。はやこゝにものいひし人ありと、思ひいでゝたちやすらふに、ついちのくづれより云々(花桜折る少将)」と見える。つまり、これは少将が先刻の女の処へ引き返さうかと思つたが、それも面倒なことだと思ひ直し、家路を指して行くと、桜の花は月光にかすんで、あたりは築土に囲まれた一軒の小家が目にとまつた。少将は行き過ぎ難くして附近に休んでゐるうちに、以前この小家に心を語り合つた女があることを思ひ出し、訪ねてみようかと思案する一場面である。このやうに両者を比較してみると狭衣の第二段と「花桜折る少将」の第一段との結構といひ文章といひ、両者の一致には著作上何らかの關係をもつてゐることは想像に難くないところである。殊に「うちかすみにくもりたる月影…築地ところへくづれて、花のこずゑどもおもしろ見入らるゝ所あり(狭衣物語)」と「くまなき月にところへくづれて花の木どもゝひとへにまがひぬべくかすみたり(花桜折る少将)」との両文辭の契合は、退引ならぬ確証でもあらう。

次に狭衣の第一段と「花桜折る少将」の第二段との内容を対照して見るに、それは上にも説明する如く、両者の当該文段の冒頭には物語主人公と相手の女との歌の遣り取りについて物語は描き、しかも両物語とも、これらの事柄に続いて主人公の所に次のやうな脚色で仲間の男性が訪ねて来るように共通な企てを施してゐる。すなはち狭衣では、「さきの声あまたきこゆれば、誰ならむとおほすに中略、今は宰相中将とぞいふかし、それより下の若君達など鞠もたせて参

りたるなりけり(狭衣)」とあれば、「花桜折る少将」の場合にも、「とあるをみ給ふほどに源中将・兵衛佐小弓もたせておはしたり(花桜折る少将)」と見える通り、いづれも遊び具を持ちながらやつて来るといふ風に、二作品の技法は全く同趣の仕組みとなつてゐる。この遊戯に引き続いて狭衣では、狭衣大将が桜の花の散りかゝるのを眺めながら朗詠を吟ずる一節に

花のいたう散りかゝるを見給ひて、「かうりたまかへりて、あとなるはふかし」と、忍びやかに口ずさび給ひて云々(狭衣物語)とある。ところが「花桜折る少将」でもこれと同様に主人公である少将が桜の花の散り乱れる様を眺めながら歌を口吟む場面を、

はなの木どものさきみだれたる、いとおほくちるをみて、あはでちるはなみるをりはひたみちにとあれば云々

と描いてゐる。殊にこの場合狭衣の文面に「花のいたう散りかゝるを見給ひて(狭衣物語)」とあれば、「花桜折る少将」にも「はなの木どものさきみだれたる、いとおほくちるをみて(花桜折る少将)」とあつて、この点も遇合とは思はれぬほど酷似するものがある。

最後に両作品の第三段の内容について比較検討してみることにする。つまり狭衣物語に於けるこの段は、主人公狭衣が右近ノ君を通じて致仕大納言の姫君に交渉を持たうとする場面であるが、同様に「花桜折る少将」の場合も、人主公の少将は侍従の道季の取り計ひによつて故源中納言の姫君が紹介されるといふ筆法で、しかもこの場合の彼我の登場人物を対比してみても、總て一致するものばかりである。また狭衣では、かの右近君の素性について「上の御方に古人にてさぶらふ右近君といふ人語り聞えて、彼処にもさるたよりなん

親しく通へば云々(狭衣卷四上)」と性格つけてゐるが、この女房は狭衣の母宮に仕へてゐる身であると共に、致仕大納言の家にも親しく出入りする関係から、右近君は狭衣に「致仕大納言ときこゆる人、誰ひとりかしづき給へる御むすめ、かぎりなくをかしげにて、齋院になむ少し似たてまつり給へる(狭衣卷四上)」とすゝめて二人の間を取り持つのである。ところで「花桜折る少将」の第三段における光季の素性も「みつすゑがくるまにておはしぬ」と見える通り、元来光季は少将の侍従であり、その上この侍従は少将が一夜群薄の陰から覗きみた少納言の君と密かな関係を結んでゐるやうになつてゐる。本物語の作中で光季は、この少納言の君が仕へる姫君について「いかゞ女のめでたてまつらざらん。このゑのみかどわたりにこそめでたくひく人あれ。なに事にもいとゆゑづきてぞみゆる。」と少将に申し上げてゐる。つまり光季は主人に当る少将と源中納言の姫君とを引き合せようと企てるのである。このやうな登場人物の組み合せや、それらの各人物の性格を検討してみても解るやうに、狭衣と「花桜折る少将」とは著述上並々ならぬ因縁が推測されるのである。

二

「花桜折る少将」と狭衣卷四上との構想上の近似については纒々上述した通りであるが、次に右の場合に於ける語句上の類似箇所を指摘することにする。

狭衣卷四上で、狭衣が賀茂の齋院の源氏宮を訪ねた帰路に、故式部卿宮の邸を覗く場面に次の一節がある。

うすがすみにくもりたる月影、さやかにあらぬしも、いとゞも
の心細げなる空の気色を、道すがらながめ給ひても、思ひたちし
本意は、やがてたがひて止みぬべきにや。中略ざりとも頼もしかりしを、なぞやかくよしなしありきも、数つもればいと有るまじき事ぞかし。とおぼし出づれば物すさまじうなりて引きかへす心地し給へば、しばしおし留めさせ給へるに、築土ところどころくづれて、^A花のこずゑども、おもしろう見入られるゝ所あり。道季召して「いかなる人のすみかぞ」と問ひたまへば、「故式部御官にさぶらふ。宰相中将もこゝになむおはする。」と申せば、いまま少し御心とまりて、ちかく遣りよせて見給へば、門はさしてけり。
(狭衣巻四上)

これに対し、「花桜折る少将」の冒頭で、物語の主人公である少将が夜遅く女の所からの帰路に、かつて関係を結んだ一軒の小家を訪ねたところ、そこに思はぬ美しい女を見初めたといふ一文が次のやうにある。

^F月にはかられて夜ふかくおきにけるも、おもふらむところいとほしけれど、^Dたちかへらむも、とほきほどなれば、やう／＼ゆくに、こいゑなどにれいおとなふものもきこえず。くまなき月に、^A所々の花の木どもゝひとへにまがひぬべくかすみたり。いますこしすぎで、みつるところよりも、おもしろくすぎがたき心ちして。
そなたへとゆきもやられずはなざくらにほふとかげにたびたゝれつゝ、
とうちずむじて、はやこゝにもいひし人あり、と思ひいでゝ、
たちやすらふに、^{B'}ついでにくづれより、しろきものゝいたうしは

「花桜折る少将」と狭衣物語との交渉

ぶきつゝいづめり。

あはれげにあれ、^E人げなき所なれば、こゝかしこのぞけど、とがむる人なし。このありつるものゝ返るよびて、「こゝにすみ給ひし人は、いまだおはすや、^C山人にものきこえんといふひとあり』
とのせよ」といへば、「その御かたはこゝにもおはしませず、なにかいふ所になんすませ給ふ。」ときこえつれば、あはれの事やあまなどにやなりたるらんとうしろめたくて、「かのみつとほにはあはじや。」など、ほゝゑみでの給ふほどに、つまどをやわらかいはなつおとすなり。(花桜折る少将)

右の両場面の表現法を仔細に吟味する時、次の如く詞句上誠に似通ふものがある。

A 花のこずゑども、おもしろう見入られるゝ所あり。(狭衣)

A' 所々の花の木どもゝひとへにまがひぬべくかすみたり。(花桜折る少将)

B 築土所々くづれて (狭衣)

B' ついでにくづれより (花桜折る少将)

C いかなる人のすみかぞ (狭衣)

C' こゝにすみ給ひし人は、いまだおはすや (花桜折る少将)

D やがてたがひて止みぬべきにや中略ざりとも頼もしかりしを (狭衣)

D' たちかへらむも、とほきほどなれば (花桜折る少将)

しかも両場面についての筋の展開や背景の描写などは、全く同巧の筆法となつてゐるなどの諸点については、既に前述した通りであるが、更に上例文の如き外部的な文辭も、AとA'、BとB'、CとC'、D

とD'といふ具合に、著作上何等かの交渉を有する如く甚だ相似通ふものがある。なほ、狭衣卷二上で狭衣は、大式乳母の妹であり、女二宮の乳母にあたる中納言佐を訪ねた際に、はからずも女二宮の寢所に忍ぶ場面の一文に、

南の戸口のかたに寄りて聞き給へば、妻戸細めにあきて、火の光ほのかに見ゆ。寄りてやをら開くれど、とがむる人なし、火桶に火などおこしおきて、夜居の僧のあからさまに出でたる跡と見ゆ。

(狭衣卷二上)

とある。この例文の傍線E「寄りてやをら開くれど、とがむる人なし」の箇所は前に掲げた「花桜折る少将」の例文中の傍線E「人げなき所なれば、こゝかしこのぞけど、とがむる人なし」の本文に全く酷似することになる。また狭衣卷三中で、狭衣が飛鳥井姫君の遺腹の子を見たさに、一品宮の方に忍び入る場面の一詞に、

F 忍びたる所より夜深く帰り給ふついでに、やがて一条の宮へおはするに、この宮の御門いととく開きて、いづれの殿上人の車にか、夜もすがら立ちあかしけると見ゆるは、いかなる人の局より出づる人ならむと見入れ給ふ。(狭衣卷三中)

と見えるが、この文中の傍線F「忍びたる所より夜深く帰り給ふついでに」と、上載の「花桜折る少将」における「月にはかられて夜ふかくおきにけるも、おもふらむところいとほしけれど」とある趣向とも似通ふものがあるのである。

上例の狭衣物語卷四上「うすがすみに云々」といふ本文の直ぐ前は、狭衣が賀茂の蹴鞠の会の後、齋院の側で皆から琴を弾くやうに促がされる場面となつてゐる。その一文に、

日暮れぬればみなほりぬるに、いつしかと夕月夜さし出でて、梢どもいと面白う見えわたりたり。さまざまの御琴ども、みすの中より出させ給へば、とりどりにゆづり給ひつゝ、大將は手もふれ給はぬを、大納言「あるまじき事なり」とて琴をせめてたてまつり給へば、「御前にては更にめづらしげなく、中々に侍り」とのたまひて、たゞ肩うちならして、「さくら人」うたひたまふ御声のおもしろさに、まさることなかりける。をかしき程にしばし遊びて、人々まかで給ふに、織物のほそなが、小袖などやうの物どもも賜はせけり。(狭衣卷四上)

とある。この文の構想は、丁度「花桜折る少将」にたはぶれつゝもるともにいづ。かのみつる所たづねばやとおぼすゆふがたとのにまうで給ひて、くれゆくほどの空いたうかすみこめて、はなのいとおもしろくちりみだるゝゆふばえを、みすまきあげてながめで給へる御かたち、いはんかたなくひかりみちてはなのほひもむげにけをさるゝ心ちぞする、びわをわうしきてうにしらべて、いとどのやかにをかしくひき給ふ御てつきなど、かぎりなき女もかくはえあらじとみゆ。この方の人ゝめしいでゝ、さまざまうちあはせつゝあそび給ふ。

とある部分に符合する。つまりこの箇所は、主人公の少将は源中將・兵衛の佐などと遊び戯れた夕方に父の邸にお出でになられて、暮れ行く花の景色を眺め、音楽に通じた方々を呼ばれて合奏される場面であつて、この趣向は右の狭衣における「日暮れぬれば云々」の場面と全く同趣のものと云へよう。殊に狭衣物語に「日暮れぬればみなほりぬるに」とあれば、「花桜折る少将」にも「ゆふがた

とのにまうで給ひて云々」とあつて、両者の辞句の間にも創作上並々ならぬ關係が想定される。またこの場合、狹衣の容姿については「いつしかと夕月夜さし出でて、稍どもいと面白う見えわたさたり云々」とあれば、一方少將の容貌についても「くれゆくほどの空いとうかすみこめて、はなのいとおもしろくちりみだるゝゆふばえを、みすまきあげてながめいで給へる御かたち云々」とあつて、両者の場面的趣向や文章面も甚しく相似てゐることになる。

たゞ狹衣の依拠する「花桜折る少將」の著述材料については、雑誌国文学昭和三十六年十二月号所載「花桜折る少將と源氏末摘花との交渉」の草稿に詳述の通り、それは源氏物語末摘花巻及び蓬生巻で光源氏が花散里を訪ねる途中に、末摘花の邸に立寄り一文に拠るものである。従つて、ややもすれば右の狹衣の場面へも短篇物語の「花桜折る少將」ではなく、源氏の当該箇所によるものではないかといふ疑念が生じ易い。しかしながら、右の小論中に源氏と「花桜折る少將」との具体的な酷似点を詳しく説明してゐるのと、この「花桜折る少將」と狹衣との一致点とを比較対照すれば、重ねて此処に説明するまでもなく、一目瞭然と両物語の結構・人物・背景など小説を構成する素因や展開の因果關係、または文辞上の類似点から推し、且つ後段の解説通り狹衣は「花桜折る少將」より後年の作品であるといふ理由によつて、「花桜折る少將」が狹衣へ直接の影響を及ぼしたことが納得されるであらう。

更に「花桜折る少將」の題名や「花桜折る」の意味については、さきに雑誌論究日本文学、昭和三十五年十一月号所載「花桜折る少將の題名統考」の中で詳述した通りであるが、そもそも「花桜折る

「花桜折る少將」と狹衣物語との交渉

少將」といふ題名中の「花桜折る」とは、美人を手に入れるといふ意味なのである。ところで本論冒頭にも述べて置いたが、「花桜折る少將」と直接の交渉を持つ狹衣物語巻四上の本文中に、狹衣が齋院の源氏宮を訪ねて、

みかきもる野辺の霞はかなくて折らですぎゆく花桜かな
と何気なく口ずさむと齋院の侍女である新少將が、

花ざくら野辺の霞のひま／＼に折らでは人のすぐるものかは
と返歌する個所がある。この二首の歌も圈点を施す語句の意味から実は「花桜折る少將」の題名とは直接の影響關係があつたものではないからうか。つまり「花桜折る少將」の「花桜折る」といふ詞句並びにその意味のヒントで、狹衣の作者は、右の歌で「……折らですぎゆく花桜かな」とか、「花ざくら……折らで」などの歌句を用いたやうに思はれる。

三

「花桜折る少將」物語に見える和歌の中で、「散る花をしみとめても君なくばたれにかみせん宿の桜を」の一首が、風葉集巻二、春下に収められてゐる。元來風葉集の成立は、この和歌集の序にも「ふみながしといふとしのやとせ、ふりみふらずみしぐるゝころ、これをたてまつりぬるとなり。」と見える通り、文永八年（一二七〇）に出来あがつたものである。従つて「花桜折る少將」といふ短篇物語は、この風葉集成立以前に著作されたことになる。ところで「花桜折る少將」の著述材料については、さきに私は雑誌国文学、昭和三十六年十二月号に「花桜折る少將と源氏末摘花との交渉」と

題して發表した如く、この短篇物語は、源氏物語末摘花の巻及び蓬生巻に見える源氏君が花散里を訪ふ途中に末摘花の所へ立ち寄る場面に依拠して創作されたものである。源氏物語の成立については色々異説もあるが、岡一男博士著「源氏物語の基礎的研究」によれば、次のやうに説明してゐる。すなわち「私は紫式部の伝説と日記とに依拠する限り、源氏物語は彼女の寡居の年である長保三年（一〇〇一）の秋から寛弘六年（一〇〇九）の夏までの九年間に著作されたとして、まづ大過ないと信ずる（源氏物語の基本形態、制作年代及び創作過程）」と述べてをられる。もし源氏物語の成立が博士の論述通りだとするならば、堤中納言物語の一篇である「花桜折る少将」の制作年代は、少くとも寛弘六年（一〇〇九）から文永七年（一一七〇）の間のいつれかの年に著作されたことになる。

さて、この「花桜折る少将」の成立年代については、さしたる論証の根拠もないまゝに漠然と平安朝の作品と看做されて今日に至つた感がある。たゞ山岸徳平博士は、その著「堤中納言物語評解」の解題の中で、「少くとも平安時代の後期でも、後拾遺集以前頃で、前記に近く、長元、長曆（一一二八—一三九）頃か、その前後の所産で、凡そその推測には、後一条・後朱雀頃のものではあるまいか。」と推測されてゐる。今この物語の成立年代を推定する一つの手掛りを目当てに「花桜折る少将」の文章上の用語を吟味する時、文中には時代色を帯びた特徴ある語も見えるので、次にその解説を試みることにする。

(イ) 本物語の第一段中に

「少納言のきみこそ、あけやしぬらん。いでてみ給へ。」といふ。

中略しばしみればおとなしき人の「すゑみつは、などかいままでおきぬぞ、弁の君こそ、こゝなりつる。まゐり給へ。」といふは、ものへまうづるなるべし。

との一文がある。ところで右の文章の「少納言のきみこそ」・「弁の君こそ」の「こそ」について考へてみたい。この種のこそは早くより何某様といふ称呼の下に添つて尊称をあらはす一種の接尾語となつて、それが平安時代わけても院政期以前或はその前後作品で盛に用ゐられてゐる。例へば

○わらはべの急ぎ来て「右近の君こそ、まづもの見給へ。中将殿

こそこれより渡り給ひぬれ」といへば（源氏物語 夕顔巻）

○「えい。北殿こそ聞き給ふや」などいひかはすも聞ゆ。（源氏物語 夕顔巻）

○上こそ、この寺におはせし源氏の君こそおはしたなれ（源氏物語 若紫巻）

○「人間の寄り来て、我が君こそ、先づ物聞えむ。」（枕草子 五

十一段）

○「や、大殿こそ」と申させ給へば、（栄花物語 さまゝの悦）

○「父こそ」と呼べば、忠行「何ぞ」と云へば、（今昔物語）

（同）

(ロ) 同じく第一段中に

○ものいひたるも、らうたきものゝ、ゆゑ／＼しくきこゆ。うれしくもみつるかなとおもふに、やう／＼あくれば帰り給ひぬ。

右の「ゆゑ／＼しく」は「故々しく」で、「由ありげに」・「由緒ありげに」との意である。この「ゆゑ／＼し」の用例も平安朝中期前

後の諸作品に最も多く用ゐられてゐるやうである。参考のためにその用例を挙示すれば次の通りである。

○扇さしかくして具したるさまいとゆゑ／＼し年四十ばかりなり
(宇津保物語楼の上)

○いとあてはかにゆゑ／＼しき声して上に人二人ばかり、下仕なめり。
(宇津保物語 楼の上)

○御供の人々にもゆゑ／＼しき看などしていさせ給へり。
(源氏物語 総角)

○内侍のかみこそはらう／＼しくゆゑ／＼しき方は人にまさり給へれ
(源氏物語 朝顔巻)

○かくとりあへずおもひより給へるゆゑ／＼しきなどををかしく御覽ず。
(源氏物語 少女巻)

○の給はする御有様こよなくゆゑ／＼しくおはします
(源氏物語 少女巻)

○籬の内にゆゑ／＼しく愛敬づきたる女の音して
(今昔物語 巻二四 第六)

○事このましき人々は、おのづからゆゑ／＼しうしたり。
(栄花物語 はつ花)

○ゆゑ／＼しきからはしどもを渡り、木の間を分けつゝ帰りいる程も
(栄花物語 はつ花)

○ゆゑ／＼しき御かたのやうになんありける。
(栄花物語 晩待星)

(ハ)「花桜折る少将」の第二段で、少将のところに源中将・兵衛の佐等が、お供の者に小弓を持たせながら訪ねて来た時の一文に、

「花桜折る少将」と狭衣物語との交渉

「よべはいづくにかくれ給へりしぞ。うちに御あそびありてめしゝかども、みつけたてまつらでこそ」との給へば、「こゝにこそ侍りしか。あやしかりける事かな」などの給ふ。はなの木どものさきみだれたる。いとおほくちるをみて、

あはでちるはなみるをりはひたみちに
とあれば、佐

わが身にかつはよわりにしかな
とある。この文中の終助詞「かな」の終止的用法は、奈良朝から平安朝前期まで用ゐられたと思はれる「かも」に代つて現はれたものである。この「かな」は最初に和歌などの韻文中に出て来たのであるが、それが平安朝中期以後からは散文にも見えるやうになつた。

右の文中の「かな」などもこの時代に該当する用法と思はれる。以上は時代的用語上から物語のおほよその成立を見定めようとしたものであるが、次に「花桜折る少将」物語中には、左のやうな短歌、並びに短連歌が見えるのである。いまこれらの歌の特色を吟味して、本物語の成立を推測することにする。

(1)そなたへとゆきもやられずはなざくらにほふとかげにたびたゝ
れつゝ

(2)ならざりしいにしへよりもあをやぎのいとゞぞけさはおもひみ
だるゝ

(3)かけざりしかたにそばへしいとなればとくとみしまにまたみだ
れつゝ

(4)ちるはなををしみとめても君なくばたれにかみせんやどのさく
らを

(5)あはでちるはなみるをりはひたみちにわが身にかつはよわり
にしかな

右の内(2)(3)の歌の詞遣ひは優しくその調べはしめやかであり、その上これらの歌の傍線の表現面には連想、特にたとへの技法が窺はれる。また(1)(4)の歌には殊に唯美的な古今風の感情の円熟さが見受けられるのである。このやうな歌風は、決して平安朝後期になつて和歌が新しい傾向へと転換し出した頃のものとは考へられまい。右の四種は後拾遺集の成立(一一〇八六)以前の抒情的な傾向と色彩を示してゐるのである。「花桜折る少将」に見える連歌について、山岸徳平博士はその著「堤中納言物語評解」の解題中で「短篇連歌としては、素朴と言うか、素拙と言ふべきか、そのいずれかの類のもので、拾遺集に見えるやうな性格のものに属して居る。」と述べてをられるほどである。按ずるに「花桜折る少将」の成立は、色々の面から推して天喜三年(一一〇五五)成立の「逢坂越えぬ権中納言」と略々同じ頃か、少し後の作品と思はれるが、この論証については改めて別の機会に発表することにする。

一方狭衣物語の作者については、藤原定家は、その著古今集僻案抄の「をかたまの木」についての註の中で、六条斎院宣旨であらうといはれたものであるが、この推定は最早定説化しつゝある現状なのである。従つて、この物語の成立年代も六条斎院宣旨の歿した寛治六年(一一〇九二)以前には世に出たものと信じてよいと考へられる。久松潜一博士編「日本文学史(中古)」にも「同作者である六条斎院宣旨源頼国女が、構想をととのへて着手し、恐らく作者の四十年代以後五十代と思はれる後冷泉天皇の治暦末年(一一〇六五—一〇六八)には成り噴々たる評をえたものと思はれるのである。」と見える如く、狭衣は平安朝後期の後朱雀・後冷泉天皇の頃の作品のやうに考へられる。このやうな事情から判断して、前述の「花桜折る少将」と狭衣との典拠関係に於いては、当然「花桜折る少将」のそれらが狭衣のこれらに直接の影響を及ぼしたことになる。

昭和三十五年 四月十日稿

昭和三十六年十二月一日補

昭和三十八年 一月五日再補